



## 【本日のメニュー】

- はじめに——「おとなの寺子屋」開講の経緯と今年度の概要
- 三次の往来本(三次本)と小泉の往来物研究
- 歌川広重「手習出精双六」を読む
- 往来物(往来本)とその分類
- 往来物に示されたカリキュラム

## はじめに——「おとなの寺子屋」開講の経緯と今年度の概要

## ◎三次市重要文化財「往来本」デジタル化と、「おとなの寺子屋」開講の経緯

往来本は一般に「往来物」と呼ばれ、平安時代後期から明治・大正初期までに作られた読み書き教科書の総称です。往来物のルーツは、平安貴族子弟の手習い教材です。この時代には手紙文が題材となり、手紙の往復文(往状・返状)で読み書きを学んだことから「往来物」と呼ばれるようになりました。中世以降は語彙習得のための種々の工夫がなされ、さらに江戸時代になると庶民の読み書き教材として寺子屋(手習塾)等でさかんに使用され、地域独自の往来物なども無数に誕生しました。出版された往来物は8000種以上ありますが、手習師匠独自の手習本を含めると数万種に及ぶと推定されます。

三次市立図書館の往来本612点(一部、非往来本を含む)は、図書館設立の契機となっただけでなく、日本有数の貴重なコレクションとして戦前から多くの研究者に注目され、研究されてきました。昭和37年(1962)には三次市重要文化財に指定されましたが、残念ながら市民一般には余り知られていません。

公益財団法人図書館振興財団の平成29年度振興助成を受け、「往来本」612点より特に貴重な196点を選んでデジタル化を進め、平成30年4月に一般公開しました(デジタル化資料の選定や各資料の解題は小泉が担当)が、それに先駆けて同年2月25日に小泉が三次市を訪れ、「往来物の世界—三次市往来本の価値と位置—」と題して講演を行いました。その際、市の重要文化財の指定を受けてから半世紀以上を経過しつつも、往来本の存在について市民にほとんど知られていない現状に対し、「定期的な往来本の講座を始めてはどうか」「図書館職員にも勉強して頂くことが大切」と提言し、予算の関係からネットを活用した講座が検討されました。

その結果、全7回(第1-6回はネット講座、第7回は講師が三次を訪れて講義)の「おとなの寺子屋」が平成30年9月に開講しました。本講座では、毎回、貴重な往来本を取り上げ、その魅力や意義を分かりやすく解説します。受講者の特典として小泉が無償提供する往来物のデジタル画像のダウンロードサービスが受けられほか、「三次市立図書館・往来本デジタルアーカイブ」により、いつでも、どこでもパソコン・スマホで原本を読むことができます。

この方式には次のメリットがあります。

- ①安価・簡便なシステム
- ②誰でも利用できる講座
- ③膨大なデジタル画像の活用
- ④ポインター・板書・WEB頁掲載
- ⑤距離感を全く感じさせない方式
- ⑥その場で改善、迅速なフィードバック

## ◎「おとなの寺子屋」2019年度(第8-14回)の概要 \* 下線の資料は「往来本デジタルアーカイブ」で閲覧できます

・今年は特定テーマを中心に往来本と関連資料を紹介します。

- 5/17 第8回「往来物の世界Ⅱ」\* 往来物の概要、三次市重要文化財「往来本」の由来、往来物を学ぶ意義など
- 6/21 第9回「江戸の婚活」\* 「婚礼往来」と各種婚礼関連書 → 江戸の見合い・結納・婚礼、仲人ビジネスなど
- 7/19 第10回「江戸の旅」\* 「駅路往来」と旅行関連の往来物 → 江戸の旅支度、旅の心得や楽しみなど
- 9/20 第11回「江戸の手習い」\* 「寺子目目」と筆道教訓系の往来物や手習本 → 寺子屋での読み書き学習の諸相
- 10/18 第12回「江戸のもてなし」\* 「遊女大学」「遊女案文」等 → 遊女の接客マナーと「もてなし」の心
- 11/15 第13回「江戸の礼法」\* 「曲礼童子訓」や礼法関係の往来物 → 礼の基本と庶民の礼法や挨拶教育等
- 12/20 第14回「江戸の後継者育成」\* 「庄屋往来」と「親子茶吞吐」 → 庄屋の心得と後継者育成の様子

## 三次の往来本(三次本)と小泉の往来物研究

### ◎三次本の由来(約100年前から蒐集開始、戦争中に三次に疎開して守られたコレクション)

- ①黒崎貞枝(奈良之助、1867-1937、71歳) \* 平井右平の叔父
- \* 慶応3年(1867)7月、和歌山県生。大阪美術倶楽部書記長として活躍。
  - \* 大正末期(1920年代)～昭和10年(1935)代に蒐集(明治中期から蒐集したが財産整理の関係で全て処分)
  - \* その後集めた資料は江戸文学全般(狂歌・地誌・紀行・伝記・随筆・日記・和歌・国文・黄表紙・洒落本・滑稽本・漢籍)などあらゆる分野に及び、8000冊近くに達した(玖呂社記文庫)
  - \* 昭和10年(1935)11/25～12/20、大阪城天守閣で「往来本展覧会」で483冊を展示(この頃の往来本総点数は推計で約700冊余)
  - \* 昭和12年(1937)3月11日、71歳没後、大阪の鹿田松雲堂を通じて大阪書林倶楽部の入札会で処分 → 往来本のみは子息の黒崎羊太郎(元藤田銀行支配人)が受け継ぐ
- ②平井右平(1883-1950、66歳)
- \* 明治18年(1883)8月、京都三条大宮生。京都工芸専門学校(現、京都工芸繊維大学)教諭、染物工場経営
  - \* 昭和19年(1944)3月11日、玖呂社記文庫の往来物(610冊、うち51冊が貴重本)を全て買い取る  
→ 戦況悪化のため三次町に疎開
  - \* 昭和22年(1947)7月、三次に永住 → 文芸サークル「惜春会」に参加した縁で、同会の拠点であった吉祥院に往来本(三次文庫)の保管を依頼。
  - \* 彼の願いは、①三次に図書館を作ることと、②三次に熱心な民俗学研究者を育成することであった。
  - \* 昭和25年(1950)3月30日に永眠
- ③三次町立図書館 → 三次市立図書館
- \* 昭和27年2月1日開館。往来本は同図書館受け入れ第1号 → 昭和29年3月31日市制実施で市立図書館となる。
  - \* 昭和37年4月25日、「三次市重要文化財」に指定。

### ◎私の往来物研究と三次本

- \* 昭和62年(1987)4月から往来物研究(28歳)
  - \* 平成4-6年(1992-94)、「往来物大系」全100巻
  - \* 平成7年(1995)3月、島根女子短大・三保サト子編「三次市立図書館蔵往来物総目録」(1992年発行)を頂く。
- 平成7年(1995)10/31～11/2 三次市立図書館・事前調査(2泊3日) → 調査と収録史料の絞り込み。この調査で撮影した往来本の写真を「三次市立図書館蔵・平井文庫往来物データベース」としてWEB公開。
- 平成7年(1995)12/11～12/16 三次市立図書館・マイクロ撮影(5泊6日) → 撮影立ち会い、間紙挿入作業など。
- 平成8年(1996)7月、「稀覯往来物集成」1-8巻刊行 → 三次本55点を収録。
- \* 平成10年(1998)、「女筆手本解題」
  - \* 平成11年(1999)、金沢大学「学術博士」(学位論文『近世の女筆手本—女文をめぐる諸問題—』)
- 平成13年(2001)、「往来物解題辞典」
- \* 平成15-18年(2003-6)、「女大学資料集成」
  - \* 平成18年(2006)、「近世育児書集成」
  - \* 平成19年(2007)、「江戸の子育て十カ条」「江戸の子育て読本」
- 平成29年(2017)、三次本のデジタル化事業 → デジタル化候補のリストを作成し、対象往来本の解題を執筆。
- 平成30年(2018)、三次市立図書館発「おとなの寺子屋」開講 → デジタル化記念の講演会を機に発足。

## 歌川広重「手習出精双六」を読む

- \* 「しゆんきよう てならいしゆつせいすころく春興手習出精双六」1鋪(縦502×横372耗)、歌川広重画。弘化4年1月刊(刊行者不明)。
- \* 寺子屋入学(登山)から卒業(下山)までの教育内容などを題材にした絵双六。

### ◎「手習出精双六」の構成と内容

#### 【第1段】＝

- ・振出……弟子入 いろは  
「あさか山 いろはにほへと さくや梅」  
**浅香山の歌**……安積山影さへ見ゆる山の井の 浅き心をわが思はなくに(万葉集巻16・3807)  
\* 安積山の影までも映し出す山の泉。その泉のような浅い心を私は持っていないというのに。
- ・**難波津の歌**……難波津に咲くやこの花冬ごもり 今は春べと咲くやこの花(古今和歌集・仮名序)  
\* 難波津に花(梅)が咲いたことだ。冬は去り冬の間は籠っていて、今はもう春なので咲いたよこの花が。
- ・破門……精出して此つぎ御上り
- ・留られ……画工・板元の詫にて元座へ返る

#### 【第2段】＝

- ・わらべこだから童部子宝……通称「近道子宝」。子供の生活心得や学習内容を説く \* 教訓科
- ・みやこじ都路……通称「都路往来」「東海道往来」。東海道の宿駅を文字鎖で綴る \* 地理科
- ・江戸方角……江戸の地名や名所を方角別に列挙する \* 地理科
- ・国尽……五畿(山城・大和・河内・和泉・摂津)七道(東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海道)別の国名集。 \* 地理科
- ・名頭……男性人名に用いる漢字集 \* 語彙科

#### 【第3段】＝

- ・立文(豎文)……折らずに全紙そのままを横長に用いて書いた書状 \* 消息科・女子用
- ・源氏……「源氏かな文」「源氏かな文章」「源氏名寄文章」など異本数種。『源氏物語』の巻名集 \* 女子用
- ・女今川……貞享板系統と元禄板系統(新女今川)に大別される \* 女子用
- ・ちらし文……散らし書きの手本で多くは消息文 \* 女子用
- ・女国尽……男子一般の「国尽」の女性版 \* 地理科

#### 【第4段】＝

- ・ていきんあうらい庭訓往来……中世武家の手紙文例集で、江戸時代まで最も普及した往来 \* 古往来
- ・消息往来……安永板「類語文章往来(消息往来)」を始祖とする往来で異本多数 \* 消息科
- ・隅田川往来……隅田川周辺の名所を紹介した往来 \* 地理科
- ・商売往来……一般的な商売で用いる用語や商品名、初歩的な商人心得 \* 産業科
- ・風月往来……1年12カ月にふさわしい手紙文12通を集める \* 消息科

#### 【第5段】＝

- ・褒美……手習双紙の表紙に「弘化四年／はつ春／清書草紙」と記す(刊行年の根拠)
- ・席書……習字の発表会
- ・上り……御鏡にしら梅寒きあした哉かな／鶯にひかり和らぐ宮居かな



## 往来物(往来本)とその分類

### ○往来物とは

鎌倉・室町時代から明治・大正期に至るまで、初等教育、特に手習所用に編集された教科書の総称で、数千種つくられたといわれる。「往来」は消息往来の意で、平安末期の「明衡往来」「高山寺本古往来」などを先駆とし、書簡文の模範文例であったが、中世以降は教科書的なものとなり、「庭訓往来」「商売往来」「百姓往来」など、庶民教育に重要な役割を果たした。

(『広辞苑』第6版、2008 \*アンダーラインは第4版(1991)以降の改訂箇所)

### ○往来物概念の拡大

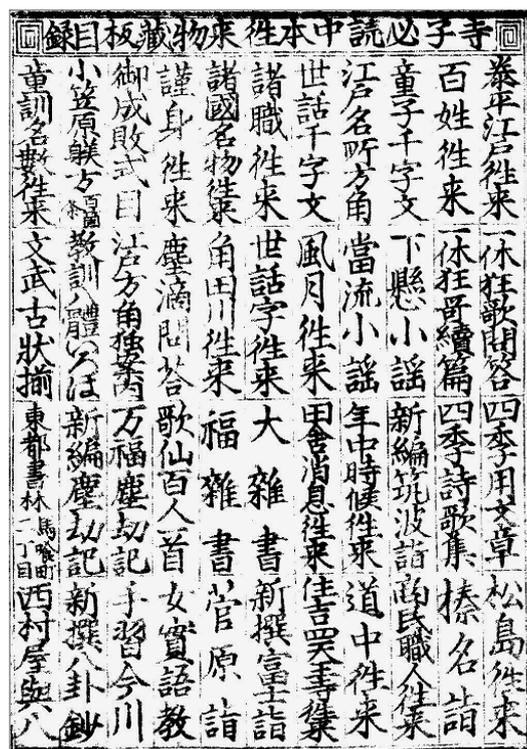
中古-中世(古往来)：貴族・僧侶子弟用の往復書簡文例集

近世：庶民子弟も対象とした読み書き初歩教材(非書簡文も多い)

### ◎西村屋与八「寺子必読中本往来物蔵板目録」

→ 全42点中、往復書簡文は皆無

- 【地理:12】 泰平江戸往来・江戸名所方角・諸国名物往来・角田川往来・江戸方角独案内・新編筑波詣・松島往来・榛名詣・道中往来・住吉四天王寺往来・新撰富士詣・菅原詣
- 【教訓:8】 謹身往来・小笠原躰方百箇条・一休狂歌問答・一休狂歌続篇・世話字往来・塵滴問答・教訓八体いろは・手習今川
- 【社会:7】 <趣味型>下懸小謡・当流小謡・四季詩歌集、<社会型>世話千字文・童訓名数往来、<年中行事型>年中時候往来、<公民型>御成敗式目
- 【産業:3】 百姓往来・諸職往来・商民職人往来
- 【消息:3】 風月往来・四季用文章・田舎消息往来
- 【女子:2】 歌仙百人一首・女実語教
- 【理数:2】 万福塵劫記・新編塵劫記
- 【語彙:1】 童子千字文
- 【歴史:1】 文武古状揃
- 【暦占:3】 大雑書・福雑書・新撰八卦鈔 \*非往来物



### ○石川謙(1891-1969)の往来物分類 \*以下の複数ジャンルを含むものを「合本科」とする

- ①古往来 ②語彙科 ③消息科 ④教訓科 ⑤歴史科 ⑥地理科 ⑦産業科 ⑧社会科 ⑨理数科 ⑩女子用

### ○分類別の三次本の特色

	小泉本			往来物DB		三次本		
	デジタル化	所蔵点数		*解題辞典3769件+α		*複数巻も1点とした		
合計	2994	7002	100%	4130	100%	521	100%	
01古往来	15	331	5%	106	3%	55	11%	*顕著に多い
02語彙科	52	367	5%	301	7%	18	3%	
03消息科	55	1322	19%	1000	24%	51	10%	*顕著に少ない
04教訓科	124	1291	18%	638	15%	49	9%	*顕著に少ない
05歴史科	29	455	6%	170	4%	33	6%	
06地理科	49	515	7%	604	15%	106	20%	*顕著に多い
07産業科	39	513	7%	271	7%	119	23%	*顕著に多い
08社会科	92	415	6%	257	6%	41	8%	
09理数科	14	105	1%	80	2%	5	1%	
10合本科	7	115	2%	93	2%	12	2%	
11女子用	138	952	14%	571	14%	26	5%	*顕著に少ない
12百人一首	65	63	1%	39	1%			
13心学	161	558	8%					
20-99その他	2154					6	1%	

\*三次本407「飛鳥山往来」は実際は「百瀬当用集」と呼ばれる消息科往来と判明したため、点数を修正した。

## ◎三次本の貴重書の例

★現存唯一、☆稀少本(全国数力所)、括弧内は成立時期、アンダーラインは小泉末所蔵

古往来 \* 現存唯一や稀少本が多い

- ①平安時代＝明衡消息[明衡往来](平安後期)、十二月往来(平安後期)  
 ②鎌倉時代＝☆〈尊円筆跡〉百也往来[雑筆往来](鎌倉中期)、☆〈尊円新板〉続庭訓往来(鎌倉後期)、  
 ☆〈尊円〉遊学往来(鎌倉後期)  
 ③南北朝時代＝☆異制庭訓往来(南北朝時代)  
 ④室町時代＝尺素往来(室町中期)、新撰類聚往来(室町中期)、★鎌倉往来・手習往来(室町中期)、  
 ☆賢濟往来(室町中期)

語彙科 \* 稀少本を含むが部分的

消息科 \* 稀少本を含むが部分的

教訓科 \* 稀少本を含むが部分的

歴史科 \* 十返舎一九の伝記型往来が多い

- ☆英将義家往来、☆栄達足利往来、☆〈甲甲新版〉木曾勇略往来、☆〈甲甲新版〉弓勢為朝往来、  
 ☆〈甲甲新版〉楠三代往来、☆〈神功皇后〉三韓平治往来、☆〈甲甲新版〉新撰曾我往来、☆〈甲甲新版〉勇烈新田往来、  
 ☆〈甲甲新版〉頼朝武功往来、☆〈甲甲新版〉頼光山入往来  
 \* 伝記型以外では、☆〈名頭曾我朝夷奈状、☆小田原状、本朝千字文

地理科 \* 全国各地にわたり、西日本方面に現存唯一や稀少本が多い(三次地方の往来物がない)

- ①北海道——箱館往来  
 ②東北——新編松島往来、道中往来[〈奥街道〉道中歌往来]、松嶋往来、松島名所文章  
 ③関東——浅草詣、☆飛鳥山往来、江戸往来[自遣往来・吾妻往来]、江戸方角、江嶋詣、王子詣、御江戸名物往来、  
 真間中山詣、☆新編三浦往来、隅田川往来[隅田川詣]、☆総州六阿弥陀詣、☆〈堀氏流水軒〉泰平往来(国尽官名)、  
 ☆〈房州小湊〉誕生寺詣、筑波詣、東京往来、東京地学往来、東京府内往来、童蒙東京往来、成田詣、日光拝覧文章、  
 榛名詣、妙義詣、★[江戸]名所往来、横浜往来  
 ④中部——伊豆地理往来、越後往来、☆海津往来、新撰富士詣、☆身延詣  
 ⑤近畿——☆大坂往来、女用都名所往来、☆河内往来、京町尽(并)国尽、猿山嵯峨名所、女訓浪華名所、竜田詣、  
 ★浪花名所名物往来、★南陽名物、☆〈社寺〉都名所往来、★山崎往来(\*京都府南部)、大和名所往来、芳野往来、  
 洛陽往来并文章、☆芦政往来、和歌名所記  
 ⑥中国——★杵築往来、☆備前往来、☆備中往来  
 ⑦四国——☆阿波往来、☆讃岐往来、☆土佐国産往来、☆松山往来  
 ⑧九州——なし  
 ⑨全国・街道・物産・その他——駅路往来、女国尽、各国産物往来、木曾路往来、木曾之道艸、皇国産物略、  
 ☆古今銘物往来、諸国郡名、諸国名山往来、諸国名物往来、〈開化〉大日本往来、東海道往来(京路往来)、  
 〈絵入文章〉日本往来、日本地理往来、〈大日本〉府県往来、府県名、〈国尽〉富士の麓、〈中仙道〉都路往来  
 ⑩外国・全世界——挿画地学往来、世界郡都往来(欧洲仏国之部)、世界の富、地球往来、〈銅版画入〉万国往来、  
 万国地名往来、邦制往来(\*世界の人種等)

産業科 \* 現存唯一や稀少本が目立つ

- ☆音曲商売往来、☆建営往来、☆国宝往来、★小間物往来、☆左官職往来、☆倡売往来、☆〈遊里〉性売往来、  
 ☆商売往来(元禄板)、★商売用字尽、☆庄屋往来、★字林往来、☆洗湯手引草[湯語教]、☆万船往来[船之由来記]、  
 ☆船方往来、☆船由来記、☆本屋往来、満作往来、☆稼往来、☆和国娼家往来

社会科 \* 稀少本が多い

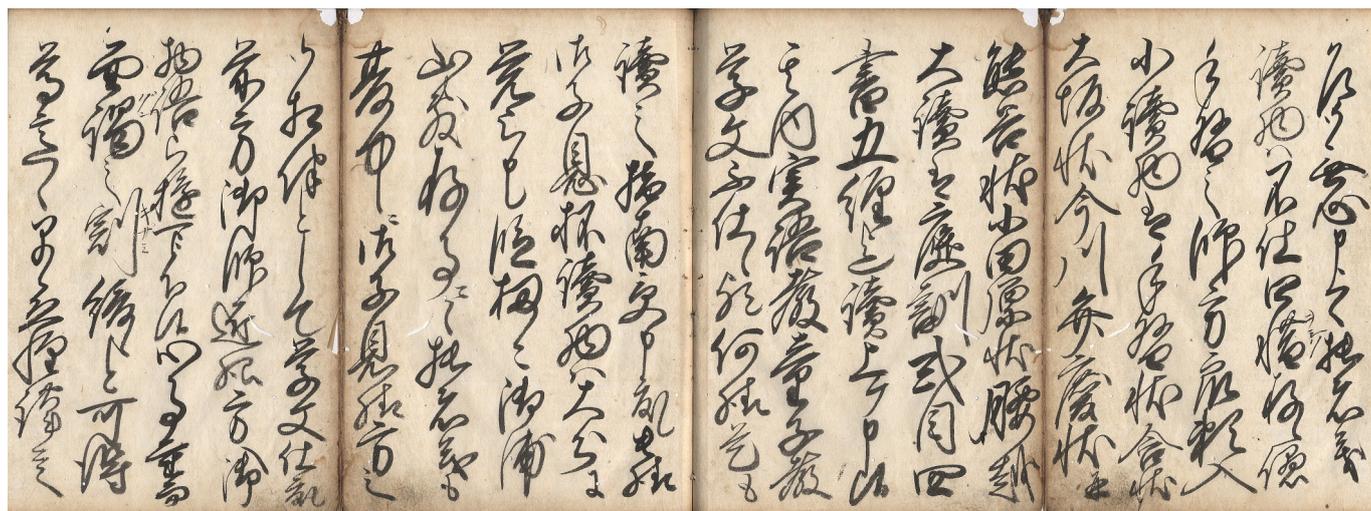
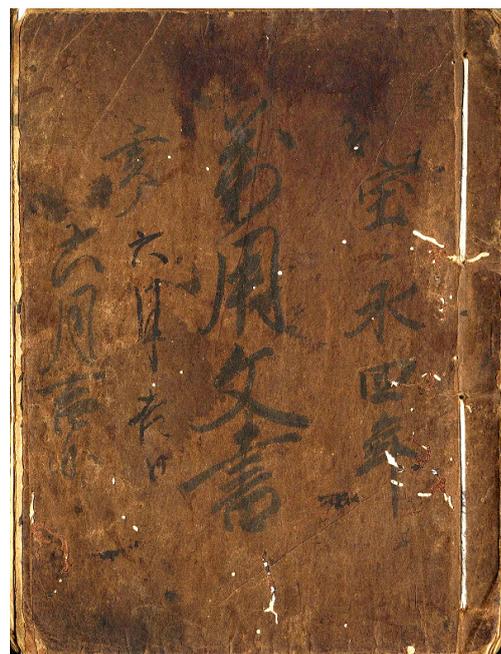
理数科 \* 和算書および窮理関係数点のみ

女子用 \* 所蔵は少ないが稀少本が多い

## 往来物に示されたカリキュラム

### ◎宝永4年(1707)書『万用文書』

- ・宝永4年写本『万用文書』は比較的古い手習本で、全20通(証文4通、消息文16通)の単簡を収録。
- ・例えば「請合申宗門手形の事」の例文中に「濃州賀茂郡上田村何助世倅何兵衛と申すに、宗旨は代々禅宗にて、同郡犬地村積善寺旦那に紛れ御座無く候…」と地名や寺院の名称が出てきたり、年号に「宝永四年月日」と明記し、差出人に「上田村庄屋 何左衛門」「犬地村 積善寺」などと記載する点から、現在の岐阜県加茂郡白川町付近で使用された手習本と推察される。
- ・この手の用文章は、地名や人名など一部の語句を入れ替えるだけで、すぐに実際の手紙や証文が完成できるように編集されており、実用的な文面が多い。20通の例文も必要最小限のもので、この程度の文書が書ければ、当時の庶民生活で十分に間に合ったであろう。
- ・文中の往来物は基本的に素読教材で、「小読物」と「大読物」という名称で難易度を区分。「小読物」として歴史上の人物や事件にまつわる「古状」を、「大読物」として古くから普及した往来物や「四書五経」を挙げている。

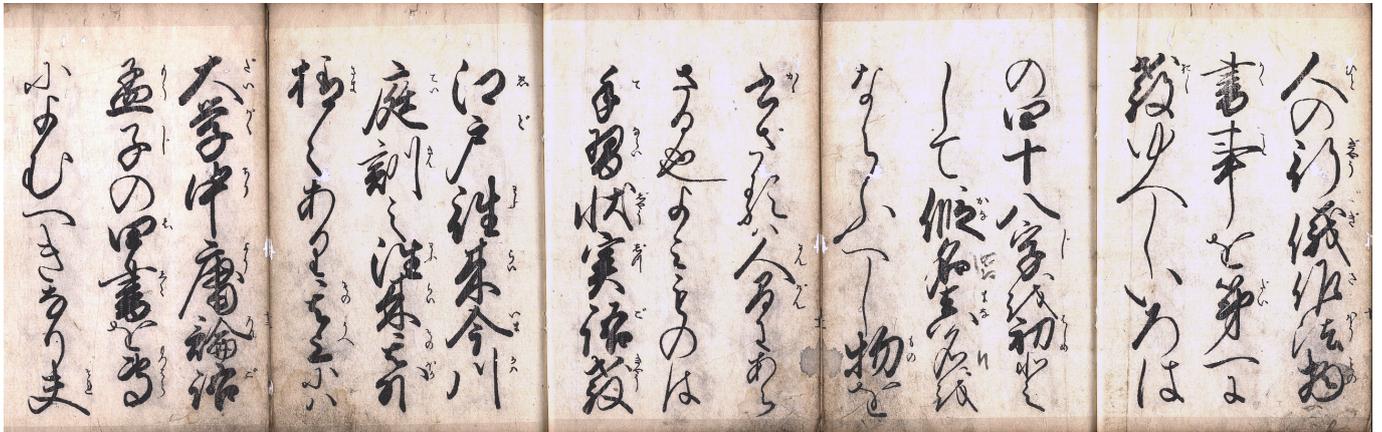


(書き下し文に改め)

御無<sup>な</sup>心乍ら申し上げ候。拙者義、読物は仕らず、口惜しく存じ候。偶<sup>たま</sup>手習之師方衆頼み入り、小読物は「        」「        」「        」「        」并に「        」「        」「        」、大読物は「        」「        」、四書五経迄<sup>まで</sup>読み上げ申し候。其の内「実語教・童子教」学文仕らず候歟。何様、是も読みの指南受け申し度く候。貴様御子息<sup>など</sup>杯読物は大分に覚え申し候段、<sup>さてさて</sup>御浦山敷く存ず事に候。拙者義も夏中に御子息様方の御相伴として学文仕り度く候。前方、御師匠様へ御物語遊ばされ下さるべく候。心事重ねて面謁<sup>まへかた</sup>の刻、<sup>きざみ ゆるゆる</sup>緩々と尊意を得べく候。早々恐惶謹言

◎正徳3年(1713)刊『近道子宝』

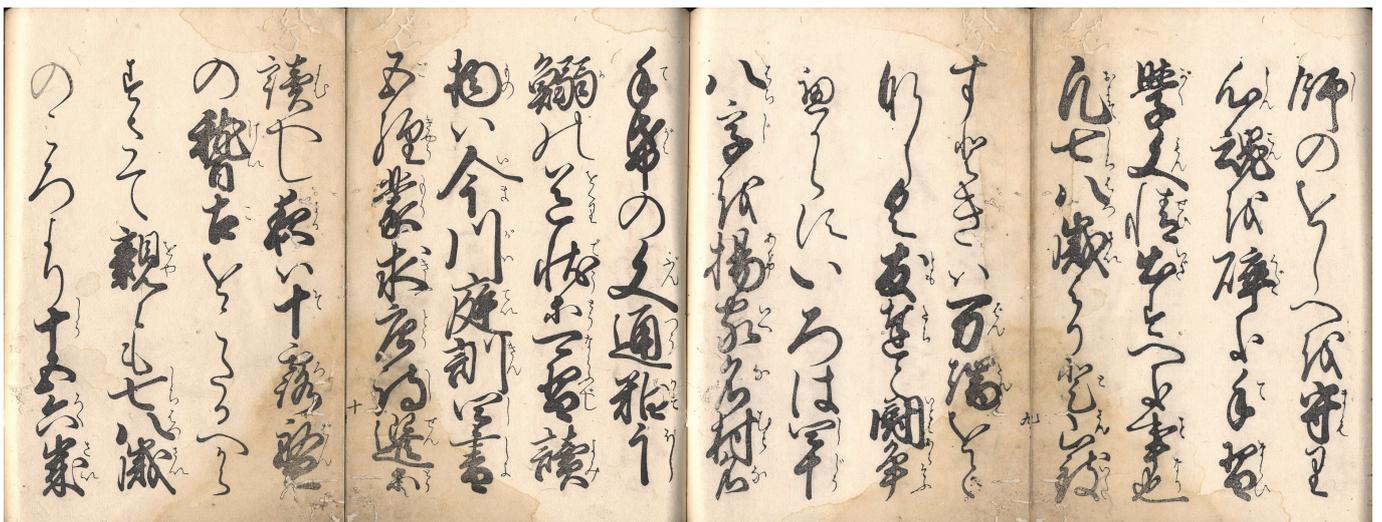
- 平井自休作、正徳3年刊『近道子宝』の初板本で板種が多く、版本往来物でカリキュラムを示した早い例。
- 本文は、「童部わらんべの時早く習いしるべき事あり。先ず上をば天という。下をば地と云う。月日の出ずる方を東という…」と起筆し、天地・四方・四季・年号・十干十二支・日本国名・地形・生物・幼少時の通過儀礼等の語句を列举した後、次の如く学習教材を書き連ねる。



いろはの四十八字を初として、假名・真名をならふべし。物を書さるは人間にあらざる也。よみものは「\_\_\_\_」  
 「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」、其外様々あり。其上には、「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」  
 「\_\_\_\_」の四書を専によむべきなり。

◎安政5年(1858)刊『浜底小児教種』

- 手習師匠、今井経山けいざんが九十九里沿岸の漁師子弟のために著した『浜底小児教種』。
- 読み・書き・算盤の学習内容を示した一節があり、たとえ漁師の子といえども、「干鰯の送り状」までは必須とし、素読では「四書五経」以下の漢籍が推奨され、夜間には算盤も練習せよと算法も推奨した。



凡七、八歳より登山致すときは、万端をとなく、友達と闘争べからず。いろは四十八字を揚、「\_\_\_\_」  
 「\_\_\_\_」、「\_\_\_\_」、「\_\_\_\_」、「\_\_\_\_」、手紙の文通、粕・干鰯の送状等習ふべし。読物は「\_\_\_\_」  
 「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」「\_\_\_\_」等読べし。夜は十露盤の稽古をこたるべからず。